

高校生になってからの私は、誰かと深く繋がることを恐れるようになっていた。きっかけは、長年親友だと思っていた友人が私の悪口を言っていたのを知ったことだ。「悪口は嫌い、嫌いな所を見つけたらお互い言い合おう。」と話していた彼女の笑顔を記憶から消すのに存分時間がかかった。人を信じてこんなにつらい思いをするなら、最初から信じないほうが良いと感じた。それから、友人とは一定の距離を保ち、心の中に人に邪魔されたくないスペースを作り、常に強力な門番を立たせるようになった。友人間の妙な馴れ合いも媚こびを売らない程度の微笑で避けてきた。

今年の夏、高校説明会の時、入学希望者にクラスで一曲ダンスを披露することになった。ダンスの得意な子が中心となって創作が始まった。私は、ダンスが苦手にもかかわらず、部活のため練習にもなかなか参加できない日々が続いた。ようやく参加ができて、振りががらりと変わっていて戸惑った。参加して覚えるのが当然と、変更した振りを自ら私に教えてくれる友人はいなかった。全体練習では同年代のリーダーから踊りのテンポがずれていると怒られ、みんなからの冷たい視線を感じた。それまで人との深い繋がりを避けてきた私には対処法が分からなかった。他の子が振り間違えたときは笑い混じりの軽い指摘で終わる。厳しさと甘さの違いに言葉を失った。私にはダンスがうまくなるしかもう道はないと思った。だから、必死でみんなの振りについていった。だが、どんなに練習しても毎回怒られた。どんなときも笑顔はたやさずにいようと心がけていたが、どうしたらうまく笑えるかわからなくなってきた。そして、明日がくるのが怖くなった。ふと安らいだときにも聞こえる私を注意する声、黒い塊が心に潜伏し繁殖し、ある日それは身体の中で爆発した。泣いて、泣いて、泣き叫んだ。そのとき、ある考えが私の頭をよぎった。「そうだ、逃げよう。」私のことを知らない土地に逃げてしまおう。何かに追い立てられた。私は、旅行カバンに手当たりしだい身の回りのものを詰め込んだ。日常で使用していないものまでカバンが破裂するくらい押し込んだ。一心不乱に今にも部屋から駆け出そうとした私を全力で止めたのは母だった。

「遼香、現実から逃げず受け取めなあかん。」

言葉とともに私の肩の上に置かれた母の手のぬくもりが伝わってきた。母の目は私をしつかり捉えていた。いつもかけてくれる優しい言葉とは違った。優しい母が大人の女性に見えた。社会にでたらもつとしんどいことが待っている。きっと大人になった私からしたら、今の私の悩みなんて悩みのうちに入らないに違いない。ここで逃げたら終わりだ。

「なに負けてるねん、自分。」

大声で叫んだらスッキリした。私は一人ではない、私をちゃんと見てくれている人がいる。多くの仕事をこなして帰ってくる母は、しんどいはずなのにそんな素振りを一切見せず、明るく振舞ってくれている。学校であったことを何時間も聴いてくれる。

自分のことばかりしか考えていない自分に気づいた。いつか私は家を離れ自分一人で生活するときがくる。今の私ではだめだ。心も身体ももつと強くならなければ。現実に行き詰まっても、それを乗り越える力をつけないとだめなのだ。

次の日から厳しい注意もそれほど心にこたえなくなつた。嫌がられてもかまわないと分らないことは積極的に聴くように心がけた。すると、今まであまり関わつたことと違った子らが声をかけて励ましてくれるようになった。ここにも私の頑張りを見てくれている人たちがいた。

もし、母の言葉を聞かず、逃げていたらどうなっていたらろう。自分を甘やかし、苦しいことから逃げる癖がつき、自分に起こる災難も周りのせいにしていたに違いない。要は、何事も自分の考え方次第なのだ。やはり人は一人では生きられない。一人のほうがいいと強がってみても心はどこか寂しかったのだ。人と向き合うことで、「人から邪魔されたくないスペース」にゆとりができ心が広がるのではないか。人と向き合うことで、人が信じられる人間になるのではないか。もう、私は目の前のことから逃げない。目の前の困難は自分を成長させてくれる糧かてなのだ。せつかく与えられた糧を無駄にせず、どんどん心に蓄え、いつか自分に自信をもてる人間になりたい。

「遼香、現実から逃げず受け取めなあかん。」

この言葉を心に残して。